

地域子育て支援拠点研修事業〈佐賀開催〉

〈開催概要〉

- 開催日 平成24年12月9日（日） 10:00～16:30
- 会場 佐賀女子短期大学 1号館
- 主催 財団法人こども未来財団
NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省、(社福)全国社会福祉協議会、
佐賀県、佐賀市、佐賀市教育委員会、
佐賀県社会福祉協議会、佐賀市社会福祉協議会、
佐賀女子短期大学
- 協力 地域子育て支援拠点研修事業「佐賀開催」実行委員会
- 参加者数 参加者数 209名
(男性 21名、女性 188名)
(行政 75名、NPO・任意団体 25名、その他団体 79名、その他 30名)



〈プログラム〉

- 主催者挨拶 岡林一枝さん 財団法人こども未来財団 事業部参事
- 開催地挨拶 緒方良行さん 佐賀県くらし環境本部こども未来課長



岡林一枝さん



緒方良行さん

- プログラム1 基調報告 「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」
講師 長谷川純さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 計画係長



「ひろば」から始まった「地域子育て支援拠点事業」の概要、今年成立した新しい制度である「子ども・子育て関連3法」の概要と、新制度の中での「地域子育て支援拠点事業の位置づけ等」について説明がありました。子ども・子育て関連3法では、主なポイントとして地域の子ども・子育て支援の充実があげられており、「子ども・子育て会議」を設置し、当事者も積極的に子育て支援に参加することが必要との説明がありました。子育てに対する保護者の不安感は都市部だけの問題ではなく、

地方でも同様の問題を抱えており、地域と家庭のつながりが薄らいでいるからこそ、「子育て親子の交流・情報提供・地域との関連・研修開催」など行う地域拠点事業の必要性を話されました。支援拠点事業が地域に開かれていくことで、家庭と地域の再構築を行うことがこれからの特徴となる旨の説明がありました。

■プログラム2 基調講演

『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

講師 金山美和子さん 長野県短期大学 専任講師

利用者（子育て親子）主体の視点に立って支援の質の標準化を目指す「ガイドライン」について、事例を交えながらわかりやすい説明がありました。まず、「ガイドライン」は、利用者の背景が様々であるからこそ画一的な「マニュアル」ではなく、柔軟な対応ができるような「ミニマムスタンダード」であることの説明がありました。また、支援者が共通理解しながらガイドラインを基に実践できることが大切であり、支援を行う中で感じる些細なズレは、研修やガイドラインの自己評価を活用しながら研鑽しあっていくことが大切であると話されました。事例を通して、支援の関係性や親子理解を多角的に捉えながら支援することの大切さを気づかせていただきました。地域子育て支援拠点事業は、これからも大きな期待が寄せられていることもあり、『子どもを産んで育てる人たちに支援者が心を広くもって関わり、「親同士」・「子ども同士」・「地域」へとつなぎ、孤立化せずに子育てできる環境をつくり上げることができるようにしていきましょう』と話されました。



■プログラム3 災害対策ガイド「備えの123」について

釘町千明さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会



ひろばの危機管理の知恵やこれまでの震災の経験談をもとに、ひろば全協が作成した子育てひろばのための災害対策ガイド「備えの123」の説明がありました。

備え1として ひろばの中で～準備・点検と話し合い～

役割分担をどう行うのか、指示を出すのは誰か、スタッフ全員が揃っていないくても対応できる体制を作っておくほか、スタッフも被災することを忘れず、家族内でも話しあっておくことが必要。

備え2として ～避難訓練とマニュアル作り～

日ごろから様々な災害を想定した避難訓練を行い、それぞれのひろばで取るべき行動をマニュアルとして作成する。災害の種類に応じた訓練を開催するなど年間計画表を作成する。訓練の大切さを利用者にも理解してもらい一緒に行動する事で避難訓練の意義も共有しておくことが大切。

備え3として ～連携と助け合い～

ひろばの中だけで判断せず、行政や地域と連携を取ることが必要であり、地域や他団体と助け合える繋がりを広く持ち、緊急時には日頃のネットワークを活かして助け合うことが復興の大事な足がかりにもなる。また、利用者に周知する内容や方法を検討しておき、普段から防災の意識をもって貰う機会が大切。

■プログラム4 分科会

<第1分科会>「拠点スタッフの役割、拠点スタッフに求められる力」

【講師】 金山美和子さん 長野県短期大学 専任講師

【事例報告】 森郁子さん 柳城児童館つどいのひろば子育て支援アドバイザー



金山美和子さん



森郁子さん

初めに森さんから、10年後20年後の親子の幸せな姿を思い浮かべながら、「地域で育ちあう環境づくり」を目指した活動事例が報告されました。森さん曰く、「元気なママはいろんな所に行っているなのでその情報を活かすことができる」、また、「お母さんたちにも役割を担ってもらうことで社会参画のきっかけとなる」、「今は気になることがあっても、何年後かには、“あの時言わずに待ってて良かった”と思えることもある。スタッフは、今の状況だけで良い悪いを決めつけていないか？当事者に届く支援である為にスタッフ間で常に考え続けることが大事だと思う。」など、親子が地域でつながり、育ちあう為のスタッフの役割を話されました。

・ワールドカフェ（グループワーク）

金山さんの指導の下、参加者による「ワールドカフェスタイル」で話し合いをしました。分科会テーマに基づき、13グループに分かれて話し合いを進め、「いろいろなサロンがあることに気づくことができた」、「笑顔で迎え、来館しやすい雰囲気をつくることの大切さが確認できた」、「同じ目線で立ち、利用者・スタッフ同士が共に認め合える関係性づくりの大切さがわかった」、



「人間性が重要」など各グループから報告があり、加えて、「拠点は必要性から始まり、それが安心できる場所、相談しやすい場所となり、その結果ひろば自身で自己解決力が身につくようにすることが求められているのではないか」という報告が出されました。

金山さんからは、スタッフ・利用者でひろばの雰囲気がつくられていることを念頭に、「あたりまえのことをあたりまえにできることが大切であり、不安を抱えてきている親も子ども落ち着いて来館できる仕掛けづくりやその親子に応じた来館しやすい時間帯の提案をするなど、どの親子にとっても居心地のいい場所づくりが大切である」と話されました。そして、そのような取組みを通じて「やがて親子が自分たちで提案できる人となっていき、市民として地域を支える人となるようになっていくこと」を話されました。

このように「ひろばで親子を支えることは地域を支える人づくりにつながっていることを認識しながら、今日学んだことを実践に活かしてください。」と話され、『白いカラス（カラスは白ですよねと話す人を前に・・・）』の事例を基に、「カラスは白じゃない黒」と返すのではなく、その人が白く見えたことに共感をし、何で白く見えたのかを心に留めながら関わるのが大切で、同じ目線・視線に立ちながら共有していくことが、多角的な支援につながっていくことを話されました。

<第2分科会>「子育て支援のさまざまな取り組み」

【コーディネーター】柴田恒美さん NPO法人子育て談話室 理事長

【事例報告】中村由美子さん 佐賀女子短期大学子育てコミュニティカレッジスタッフ

【事例報告】小川由美さん NPO法人アンジュ・ママン 施設長



柴田恒美さん



中村由美子さん



小川由美さん

まず、柴田さんから分科会の狙い、進行について説明があり、グループでのアイスブレイク（今日ここに来るまでに楽しかったことを考える）で雰囲気が和み、事例報告に進みました。

次に、中村さんから、一般的な子育てサロンとは異なる「支援者への学びの場」としてのさまざまな取り組みの紹介がありました。平成19年に「佐賀女子短期大学子育てコミュニティカレッジ“あっぷっぷ”」を開設して、地域の中での保育事例を理論化し、実践と振り返りから課題を見つけ、そして地域に生かし

還元する、その学びを継続的に繰り返していくことで、支援者のスキルアップと意識の向上を図っていること、「私たちは、どんな人的環境になれるか・・・」という子育てコミュニティカレッジ吉牟田代表の「感性」を真ん中においた研修で、地域のサポーターのみならず保育士・幼稚園教諭も共に学ぶ『保育者養成校の短大が担う、支援者を養成し地域で子育て支援を広めていく』取り組みが紹介され、その考え方が参加者の心に響きました。



また、小川さんの発表では、平成16年に大分県豊後高田市が開設した「花っこルーム」が地域の拠点のきっかけとなり、その利用者として平成19年にママさんサークルを立ち上げ、「花っこルーム」への恩返しとして「アンジュ・ママン」を結成した経緯と取り組みを話されました。平成22年には、NPO法人として5つの事業を細やかに行うようにまでなったとのことでした。中でも「待つ支援から届ける支援へ」と家庭を訪問するアウトリーチの大切さを痛感し、『ホームスタート』事業を展開されている事例は、手の届かない所へのアプローチの一つの手立てとして有意義性を感じられました。特に、「行政との協働が作り出す子育て支援への可能性とその大切さ」と、今もなお進化し続けている「当事者に寄り添いながら、地域に必要な活動を生み出していくためにチームを組み取り組んでいくことの大切さ」を述べられました。

事例発表の後は、グループワーク①「日ごろを振り返り、地域のニーズに合わせた取り組み」を皆で出し合い、キーワードを考え、今の姿を振り返りました。次に、グループワーク②「ニーズから浮かび上がってきたこれからやれそうなこと、出来そうなこと」から再度キーワードづくりを行い、これからの子育て支援のあり方の可能性を探りました。

最後に、柴田さんから「これからは子育て親子から出てくる多様なニーズに合わせた対応が必要になることから、原点に戻りこの開催で学んだことを生かして、明日からの活動を頑張ってください！」とのエールがありました。

<第3分科会>「拠点から地域へ繋がる子育て支援」

【コーディネーター】恒吉紀寿さん 北九州市立大学 准教授

【事例報告】鶴丸雅加さん 子育てサロン「かんこうドーナツ」 代表

【事例報告】藤田美穂子さん 富士ふれあいる一む代表

【事例報告】井上みゆきさん 地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会 城南区こどもプラザ 代表



恒吉紀寿さん



藤田美穂子さん

鶴丸雅加さん



井上みゆきさん

鶴丸さんは、地域の保育所や放課後児童クラブへ出向いての連携、異年齢活動交流、また、公民館行事を通じての地域との交流によりコミュニティーをつくっていくという実践事例を語られました。

そして、藤田さんは、地域の自然・特産・人材を活用して、季節ごとのサロンを地域の方と一緒に実施されている活動を紹介してくださいました。

また、井上さんは、幼稚園・公園などを活用した‘あそび‘を中心とする教室・イベント型から、居場所・交流型支援へ転換する中で子育ての日常生活を豊かにする支援を心がけてこられたことや、親が周りの人と関わりエンパワメントしていくことが地域の活性化にもつながると語られました。

第3分科会では、拠点から地域へ繋がる子育て支援について、3つの事例報告の後、9グループに分かれてワークショップを行いました。「当事者」、「OB・OG」、「ボランティア」、「住民」をテーマに、グループごとに話し合った後、発表を行いました。「PRの大切さ」、「行政と社協のほどよいつながり」、「イベントをすることによってお母さんたちをお客さんにしてしまっていないか?」、「サポーター養成講座の受講生がすぐに活動できる場所との連携」、「NPOや自主活動などのそれぞれの熱い思いを行政がどのように支援していくのか?」、「地域で立ち上がったボランティア活動が支援センターができたことで力を弱めている」、「新年度にママスタッフがなくなる」などの課題が出されました。

コーディネーターの恒吉さんは、「当事者に気づいてもらうことも大切だが、一緒にやっていくことが大切」、「支援センターができ、子育て中の一人ひとりがつながっていく反面、地域との‘壁’をつくっているところもある。地域行事へ参加するなど、顔が見えない関係から顔が見える関係への仕組みづくりが大切」、「地域へつながることを意識的に取り組む」、「団体を巻き込むことが大切」と話されました。

■プログラム5 全体会（分科会総括・ディスカッション）

【コーディネーター】吉牟田美代子さん 佐賀女子短期大学 名誉教授

【第1分科会】黒木由美さん 佐賀市子育て支援センター「ゆめ・ぼけっと」 所長

【第2分科会】柴田恒美さん NPO法人子育て談話室 理事長

【第3分科会】恒吉紀寿さん 北九州市立大学 准教授



吉牟田美代子さん



黒木由美さん 柴田恒美さん 恒吉紀寿さん

全体会では各分科会のまとめの報告がありました。まず、第1分科会では、「スタッフの役割」として、つなげるコミュニケーション能力、人間性、専門性をしっかり蓄えつつ、主体は親子であることを見失わないように支援するという確認ができたとの報告がありました。次に、第2分科会では、様々なことができることは、すなわち主体的な支援ができるということ、迷い道に入ったときは今日のガイドラインを照らし合わせることで確認作業（本質から外れない）をしていくという報告がありました。最後に、第3分科会では、「他の団体と連携したり、地域へつながることを意識的に取り組む」、「当事者を育てるためには、自主的にだけでなく一緒にやっていくことが大切」という報告がありました。

その後、各分科会の報告を受けて、吉牟田さんからまとめの話がありました。吉牟田さんは、まず、「冊子にない分科会がある。それは第4分科会の託児室。皆さんが研修を受けている間、託児室では子どもたちが『おもしろい』『楽しい』『大好き』という声をあげながら、楽しいスタッフによる居心地のいい場所が展開されていた」と大会中頑張っていた子どもや託児スタッフを気遣われました。

そして、総括として

①今日という一日みんなが集まってここにいたことが良かった。それぞれのやり方でよかった。

②自分を見つめ直す学びの場が見つかった。それを温め課題解決に使うエネルギーに変えていく。

③不完全な私達。寄り添いあっていけば良い。一人の十歩より、十人の一歩。前を向いていけばいい。

とのたとえを基に、「日々の活動の中で実践したことが自分たちの狙いに基づいていたか?」「狙いをしっかり立てて振り返ることが評価につながっていく」、「評価には課題が出て改善へと結びついていく」、「このPDCAサイクルを取り入れることも大切」との話があり、まとめられました。